

「異邦人の時」に関する考察

「異邦人の時」とは福音書の中でも唯一ルカだけが記述している終末に関する預言の一部です。この表現は聖書研究者にとって特別な関心を持つものであり、実に多くの論議に参照され、或いは全く勝手な仕方で用いられている格別の表現のようです。

それで、聖書預言を研究する者の一人（はしくれ）としては、一応の研究とその意味するところを述べておかななくてはという思いで、この記事を書いております。

まずは、聖書から、その部分を引用することから始めましょう。

「エルサレムが軍隊に囲まれるのを見たら、その滅亡が近づいたことを悟りなさい。そのとき、ユダヤにいる人々は山に逃げなさい。都の中にいる人々は、そこから立ち退きなさい。田舎にいる人々は都に入ってはならない。書かれていることがことごとく実現する報復の日だからである。

それらの日には、身重の女と乳飲み子を持つ女は不幸だ。この地には大きな苦しみがあり、この民には神の怒りが下るからである。人々は剣の刃に倒れ、捕虜となってあらゆる国に連れて行かれる。異邦人の時代が完了するまで、エルサレムは異邦人に踏み荒らされる。」

「それから、太陽と月と星に徴が現れる。地上では海がどよめき荒れ狂うので、諸国の民は、なすすべを知らず、不安に陥る。

人々は、この世界に何が起こるのかとおびえ、恐ろしさのあまり気を失うだろう。天体が揺り動かされるからである。そのとき、人の子が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗って来るのを、人々は見る。(ルカ21：20-27 新共同訳)

「異邦人の時」に関する私なりの調査を記す前に、まず、この聖句に関わる、解釈などを含めた、これまでの歴史を振り返って見ることにしましょう。「異邦人の時」は預言研究の論議の中でほとんど常にとと言えるほど、「一年に対して一日」とするという聖句と併せて論じられて来ました。それで、まずその歴史からご紹介します。

「一年に対して一日」使用の歴史

聖書研究者たちの間で、当然のように「計算法」として示される、この「一年に対して一日」という表現が使われているのは、民数記14：34とエゼキエル4：6の二箇所です。先ず民数記の方から考慮します。

「お前たちの子供は、荒れ野で四十年の間羊飼いとなり、お前たちの最後の一人が荒れ野で死体となるまで、お前たちの背信の罪を負う。あの土地を偵察した四十日という日数に応じて、一日を一年とする四十年間、お前たちの罪を負わねばならない。お前たちは、わたしに抵抗するとどうなるかを知るであろう」(民数記14：33, 34)

この記述は預言ではなく、神の裁定です。「計算方法」や「公式」として採用すべきと読む理由はどこにもありません。40 日間の背信の罪に対して40年という量刑が定められたということ以外の何物でもありません。

では次にエゼキエルの方も考慮します。

「左脇を下にして横たわり、イスラエルの家の罪を負いなさい。あなたは横たわっている日の数だけ、彼らの罪を負わなければならない。わたしは彼らの罪の年数を、日の数にして、三百九十日と定める。こうして、あなたはイスラエルの家の罪を負わねばならない。その期間が終わったら、次に右脇を下にして横たわり、ユダの家の罪を四十日間負わねばならない。各一年を一日として、それをあなたに課す。」(エゼキエル4：4－6)

この記述も民数記の場合と全く同様で、やはり量刑方法として用いられているだけで、預言や、「計算方法」の公式とする根拠は皆無です。

さて、この「一年に対して一日」という量刑方法を「公式」のように用いて当てはめたのは、西暦一世紀のユダヤ教のラビ、アキバ・ベン・ジョセフが最初とされています。

西暦9世紀のユダヤ教のラビ、ナハウエンディはダニエル書8：14の2300日に当てはめ、2300年と計算し、シローの陥落（紀元前942）から計算して紀元1358年をメシアの来る年と予想しました。

またナハウエンディは、同じダニエル書の1290日を1290年として、エルサレムの第二の神殿の破壊（紀元70年）から起算して1358年の同じ年を算出しました。

その他多数のユダヤ教のラビたちがこの「一年に対して一日」を預言成就の公式として採用して、14世紀、15世紀、19世紀にメシアの到来の年を予測しています。

キリスト教世界のほうでは修道僧、ヨアヒムが12世紀に、最初にこの「一年に対して一日」をダニエル書と黙示録11：3にある「1260日」に当てはめたのが最初とされています。ヨアヒムは紀元1260年という年を特別な年と考え、彼の追隨者たちは西暦1260年に地上の新体制が始まると信じたといわれています。

そしてそれ以来、この「一年に対して一日」は、預言研究の普通のツールとして聖書に基づいた年代予想に無数の例で常用されるようになりました。

「異邦人の時」と「一年に対して一日」の規則の適用

「神殿の外の庭はそのままにしておけ。測ってはいけない。そこは異邦人に与えられたからである。彼らは、四十二か月の間、この聖なる都を踏みにじるであろう。わたしは、自分の二人の証人に粗布をまとわせ、千二百六十日の間、預言させよう。」(黙示録11：2, 3)

ここに出て来る「異邦人に与えられた」「聖なる都市を踏みにじる」という表現から、この聖句はルカ22：1－24の「異邦人の時」の時を指しているという解釈は古くからあったよう

です。

12世紀から13世紀にかけては、紀元1260年に異邦人の時が終わる、あるいはエルサレムが復興されるなどの予想が数多く出されました。

ピラノバのアーノルドは、異邦人の時がローマ帝国によるエルサレムの破壊から、ダニエル12：11に出てくる1290日すなわち1290年目に終わると予想しました。

この予想された時期はちょうど十字軍の聖地奪回の時期に当たっていたため、その予想は十字軍を鼓舞する拠り所となったとされています。

当然のことながら、これら全ての予想はことごとく外れたわけですが、以降現代に至るまで、「異邦人の時」と「一年に対して一日」の規則の適用は実に飽くことなく、繰り返され、継承されてきました。

ジョン・アクィラ・フラウンと2520年の計算

最初に2520年の計算法を提唱したのはイギリスのジョン・アクィラ・フラウンでした。
※1（巻末資料参照）彼もまた、ミラー派と同様、1843年（後に1847年に変更）のキリスト再臨説を唱えていました。

彼はダニエル4：23の「七つの時」を終末に関わる預言とみなして、その期間が2520年と計算した創始者です。

それで、ネスカドネザル王の統治の開始の年とされる紀元前604年に2520年を加算して1917年を「イスラエル王国の栄光が完全に現される」年としました。

これを契機に、「七つの時」（2520年）を「異邦人の時」と同期間とする解釈が一般化し、同様の説が次々と打ち出されゆきました。

例えば、マナセが捕囚された紀元前677年から起算して、2520年を加えて、ミラー派を中心に当時唱えられていた予測年である「1843年」と一致させる計算法が提唱され、後にミラー自身もこれを受け入れました。

ドイツでは神学者ベンゲルが1836年を（別の計算方法から割り出して）キリスト再臨の年と定めていましたが、彼もこの2520年の計算を取り入れ、マナセの捕囚の年を紀元前685年として、これに2520年を加算して、それまで自分の提唱していた1836年に一致させています。

それは、その当時の一つのフームで、その他多数の計算法や予測年が発表されましたが、「2520年」を使用して「1843年」に再臨の年を設定するというのが、一般に広く受け入れられたようです。※2（巻末資料参照）

ネルソン・バーバーとその後継者

1844年ごろにキリストの再臨が起こらなかつた時、ミラー派の動きは幾つかのアドベントリスト（再臨派）の派閥に分かれていくことになります。

そして、これらの派は更に多くの異なった年代設定を発表していきますが、これらの中から現在のアドベンティスト派とセフンスデー・アドベンティスト派が形成されてゆきました。

ウィリアム・ミラーの仲間であったネルソン・バーバーは、1844年に予想が外れた後、一時完全に信仰を失いますが、アメリカへ帰国する船の中で聖書を読むうちに新たな年代計算法を思いつきます。帰国後、彼は、独自の調査と解釈により、アダムの創造の年とみなした年代から計算すると1873年が人類創造から6000年目に当たることを思いつき、1870年に彼独特の年代計算法を発表して1874年を来るべきキリスト再臨の年とします。彼はその教義を広めるため「真夜中の叫び」という月刊誌を発行します。

しかし、1874年になって、キリストの再臨が起こらなかった時、彼は年代計算には間違いがないと確信していたため、間違っただけは年代予測ではなくその時に起こると期待した内容の方だと考えます。そこで彼は、再臨にあたるギリシャ語のパルーシアは「見えない形で存在すること」という解釈を考えつき、キリストは1874年に予想通り再臨したが、それは目に見えない形で起こったと発表しました。

彼はすでに再臨が起こったことを示すために、雑誌の名前を「真夜中の叫び」から「朝の先触れ」に変更しましたが、信奉者の間にこの「目に見えない再臨」の説は広くは受け入れられませんでした。※3（巻末資料参照）

しかし、この説にいたく感動した人がいました。

それはペンシルバニア州アレゲーニー生まれの、チャールズ・テーズ・ラッセルです。

彼はネルソン・バーバーに会い、直ちに1874年が「目に見えない再臨」の年であることを受け入れます。そして同年1876年の10月にラッセルは、バイフル・エグザミナーという雑誌に「異邦人の時：いつ終わるのか？」という記事を書き、そこで「七つの時」は2520年であり、紀元前606年から起算して1914年に終わるといふ、その後長年にわたってのものみの塔で引き継がれている1914年の教義を初めて発表することになります。（実際はこの計算は西暦0年という年は存在しないということに気付いていませんでしたので、もし、それを考慮していたなら1913年という年が発表されることになったはずです。）更にラッセルは一連の著作の中で、1914年に神の王国が完全に確立され、地上のエルサレムは神の神殿として復興される、1914年の前に大艱難の時代が来る、等々の予想を発表しました。

後にラッセルは自分のこの予想は単なる人間の予想ではなく、1914年は「神の設定した年代」として疑いを許されない年であると信者に教えました。

しかしこれまた、1914年を過ぎても予想した出来事は生じなかったため、バーバーが1874年を守るために、年を変えるのではなく年の意義を変えたのと同様、ものみの塔の指導者も数年かかって新たな1914年を根幹とした教義を創り出しました。

そしてついに1922年のシーダーポイントの大会で、第二代会長のラザフォードは、神の王国は確かに1914年に確立されたが、それは地上ではなく、天で見えない形で起こった、という新しい解釈を発表しました。それまでは、キリストが天の神殿に来たのは1878年

であると教えていたのです。

またラザフォードは1930年までの間に、キリストの「見えない形での再臨」が起こったのは1914年であると変更しました。それまではラッセルの(そしてそれはバーバーによって最初に作られた)1874年がその年であるという教義だったのです。

こうしてここに現代のエホバの証人が、「真理」として確信し信奉する現在の年代計算法が完成したのです。

(参考資料：The GentileTimes Reconsidered -Carl Olof Jonsson 他)

こうして、歴史を簡単に振り返ってみて分かるのは、古い時代から、実に多くの終末に関する年代計算が行われてきたことが分かります。そして1900年前後は一つのピーク時にあったことも分かります。

しかし、ダニエルの「七つの時」にせよルカ21：24の「異邦人の時」にせよ、また「一日を一年とする」という規則の適用にしても、それらを結びつける根拠は聖書中のどこにもありません。

これら全ては、多くの仮説に基づいてなされたものです。「七つの時」が終末預言だと仮定すると、それが「異邦人の時」と同期間だと仮定すると、「一日を一年」が預言の年代計算のための公式として使用できると仮定すると・・・これこれが成り立つという主張です。

その仮定を証明するより、それをただ無批判に受け入れた上で、さて、その始まりは厳密に何年のどの出来事かが延々繰り返されてきたのです。

キリストの再臨(臨在)については、聖書は多くの言葉で繰り返し、それは夜の盗人のように不意に人々を襲うように来ること。ゆえに常に目覚めているべき事を強調しています。

「その日、その時は、だれも知らない。天使たちも子も知らない。ただ、父だけがご存じである。」(マタイ24：36)

「イエスは彼らに言われた、「父がご自分の権限内に置いておられる時また時期について知ることは、あなた方のあずかることはありません。」(使徒1:7)

「兄弟たち、時と時期については、あなた方は何も書き送ってもらう必要がありません。」(テサロニケ第一5:1)

どのような思考過程を踏めば、キリストの再臨の「その日、その時」は誰も知り得ないのに「その年」は計算で算出されるはずという考えが出て来るのか不思議です。

キリストは、多くの偽預言者が起こって「その時が近づいた」と言う声を上げると述べておられます。

偽預言者は何を根拠に、いつなのか誰も知らない時が、「近づいた！」と言えるのでしょうか。それは、自分たちで勝手に想定したある特定の時(年代)があるからこそ、「近い」とか「まだだ」とか「過ぎた」とかいう主張や論争が出てくるということでしょう。

さて、「異邦人の時」とはどの時を指すかについては、種々の論説があるようですが、一般的な主な解釈は次の2通りあるようです。

1 ダニエルが預言した 4 つの獣が支配する期間

(つまりバビロニアから終末期までを含む期間)

具体的にはバビロニアがエルサレムを滅ぼした紀元 586 年に始まったとされる。

2 西暦 70 年から 1967 年の六日間戦争 (第三次中東戦争) 後、エルサレムが再統一されるまでの期間

さて、「異邦人の時」に関する論議の枝葉末節はともかくとして、聖書そのものから、直接それを読み、文脈を考慮し、ストレートに考量して、この件に関する私なりの所見を述べてみようと思います。ルカ 21 : 20 - 27 を改めて引用します。

「エルサレムが軍隊に囲まれるのを見たら、その滅亡が近づいたことを悟りなさい。

そのとき、ユダヤにいる人々は山に逃げなさい。都の中にいる人々は、そこから立ち退きなさい。田舎にいる人々は都に入ってはならない。書かれていることがことごとく実現する報復の日だからである。

それらの日には、身重の女と乳飲み子を持つ女は不幸だ。この地には大きな苦しみがあり、この民には神の怒りが下るからである。

人々は剣の刃に倒れ、捕虜となってあらゆる国に連れて行かれる。異邦人の時代が完了するまで、エルサレムは異邦人に踏み荒らされる。」

「それから、太陽と月と星に徴が現れる。地上では海がどよめき荒れ狂うので、諸国の民は、なすすべを知らず、不安に陥る。人々は、この世界に何が起こるのかとおびえ、恐ろしさのあまり気を失うだろう。天体が揺り動かされるからである。そのとき、人の子が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗って来るのを、人々は見る。」(ルカ 21 : 20 - 27 新共同訳)

流れを簡単に示すと、

エルサレムが軍隊に囲まれる。滅亡が近い

災いを避けて逃げ始めるべき。定められた期間エルサレムは踏み荒らされる。

世界、諸国民の不安

天体に異変、その直後キリストの再臨。

マタイの方の記述からも流れを示しておきますと、

憎むべき破壊者が、聖なる場所に立つ。

山に逃げるべき。二度と起きないような大患難。

天体に異変。その直後キリストの再臨。

ルカとマタイの流れを比較してみると、

ダニエル書の「憎むべき破壊者」の出現から始まる。

再臨のタイミングはどちらも同じです。

異なる点は、マタイには「エルサレム」に関する具体的な記述がない。

代わりにと言うか、2度とない大患難があるとされています。

ルカではエルサレムと、諸国民の災いがそれぞれ描かれており、

マタイはそれらを併せて「大患難」と表現していると捉えることができます。

この相違点に、もう少し説明を加えますと、こういうことでしょう。

異邦人によってエルサレムが踏みにじられる出来事と諸国民の未曾有の艱難も異邦人（諸国民）からもたらされる。そしてこれらの出来事は同時に生じるということでしょう。

（神からの裁きは、その後のキリストの到来によってもたらされるので）

エルサレムが踏み荒らされるのが完了するのは、ハルマゲドン後の神によって裁かれる時点ですから、「異邦人の時」はダニエル書の「憎むべき破壊者」の出現から滅びまでの期間と言えます。

この終末期に起きるとされる預言の中で、「異邦人の時」だけ、他の時代を包含する出来事が挿入されていると捉える明確な根拠はありません。

またこの一連の記述の中の「異邦人の時」に関する部分だけ取り出して、別の預言に関連づける根拠もありません。

文脈を意図的に無視するのでない限り、ここで表現される「異邦人」は「人々を剣の刃に倒し、捕虜としてあらゆる国に連れて行くものである」ローマの軍隊であり、憎むべき破壊者（マタイ）に他なりません。

明確な理由がない限り、「異邦人の時」は、荒廃をもたらすものが起こってからキリストの臨在と裁きの執行までの時間の流れの中で起きる出来事の範ちゅうに入ると捉えられるべきです。

さて、これらの預言が西暦70年に成就したことは周知のことです。

そして、この預言が最終的な終末期に完全な形で成就することになる、いわゆる二重預言であると捉えるのも、聖書研究者にとっては定説です。

ということは、これらの出来事は基本的に少なくとも2度生じるということです。

終末期に「憎むべき破壊者」（＝不法の人、滅びの子、緋色の野獣、第八番目の王）が再び（三度？）登場します。最終的にエルサレムは諸国民による総攻撃を受けて踏みにじられることになっています。

仮に「異邦人の時」が前六世紀のユダヤ人のバビロン捕囚から始まったのであれば、「異邦人」はバビロニア人ということになります。確かにバビロニアは異邦人ですが、ダニエル書に示されている「憎むべき破壊者」ではありません。従ってこの説を立証したいのであれば、ルカ21：24の異邦人はダニエル書の「憎むべき破壊者」とは無関係であると言うことを証明しなければなりません。

さらには、すでにその期間は始まっているので、西暦70年にも、最終的成就である終末にも、

もはや改めて「開始する」ことは無くなることとなります。従って、キリストが「終わりのしるし」として語られたにも関わらずルカ21：24の「異邦人の時」についてだけは、二重預言ではないということを証明しなければならないということです。

「異邦人の時」と黙示録11：2は基本的に同じ事を述べているという解釈は古くからあることはすでに述べましたが、改めてここで、その関連した聖句を引用して比較して見ましょう。

「しかし、神殿の外の庭はそのままにしておけ。測ってはいけない。そこは異邦人に与えられたからである。彼らは、四十二か月の間、この聖なる都を踏みにじるであろう。(黙示録11：2 新共同訳)

「この獣にはまた、大言と冒瀆の言葉を吐く口が与えられ、四十二か月の間、活動する権威が与えられた。

そこで、獣は口を開いて神を冒瀆し、神の名と神の幕屋、天に住む者たちを冒瀆した。

獣は聖なる者たちと戦い、これに勝つことが許され、また、あらゆる種族、民族、言葉の違う民、国民を支配する権威が与えられた。」(黙示録13：6, 7 新共同訳)

黙示録の記述から言えば、「エルサレムが踏みにじ」られるのは「四十二か月の間」ですから、その前は踏みにじられてはいないということです。終末期の最終段階の1260日の期間、踏みにじられるのですから、エルサレムが、たとえ、歴史のいつの時点で「踏みにじられる」事を経験していたとしても、それとは無関係に「終わりのしるし」として与えられた預言の一部である「異邦人の時」はそれが単に満ちることだけでなく、改めて、キリスト臨在前に「踏みにじられ」「四十二か月の間」を経て終了することになっているということです。

福音書の預言を解釈するにあたり、定説通り二重預言として捉える場合、先ず最初の成就是、ローマの軍隊がエルサレムを包囲した時から、神殿の崩壊まで、紀元66-70年に成就是ました。

そしてそれに匹敵する最終的成就是、黙示録11：2や13：3, 4節に示されている42ヶ月(1260日)に相当する期間と言えます。つまりこれが本来のルカ21：24で預言されている「異邦人の時」と表現される期間であると言えます。

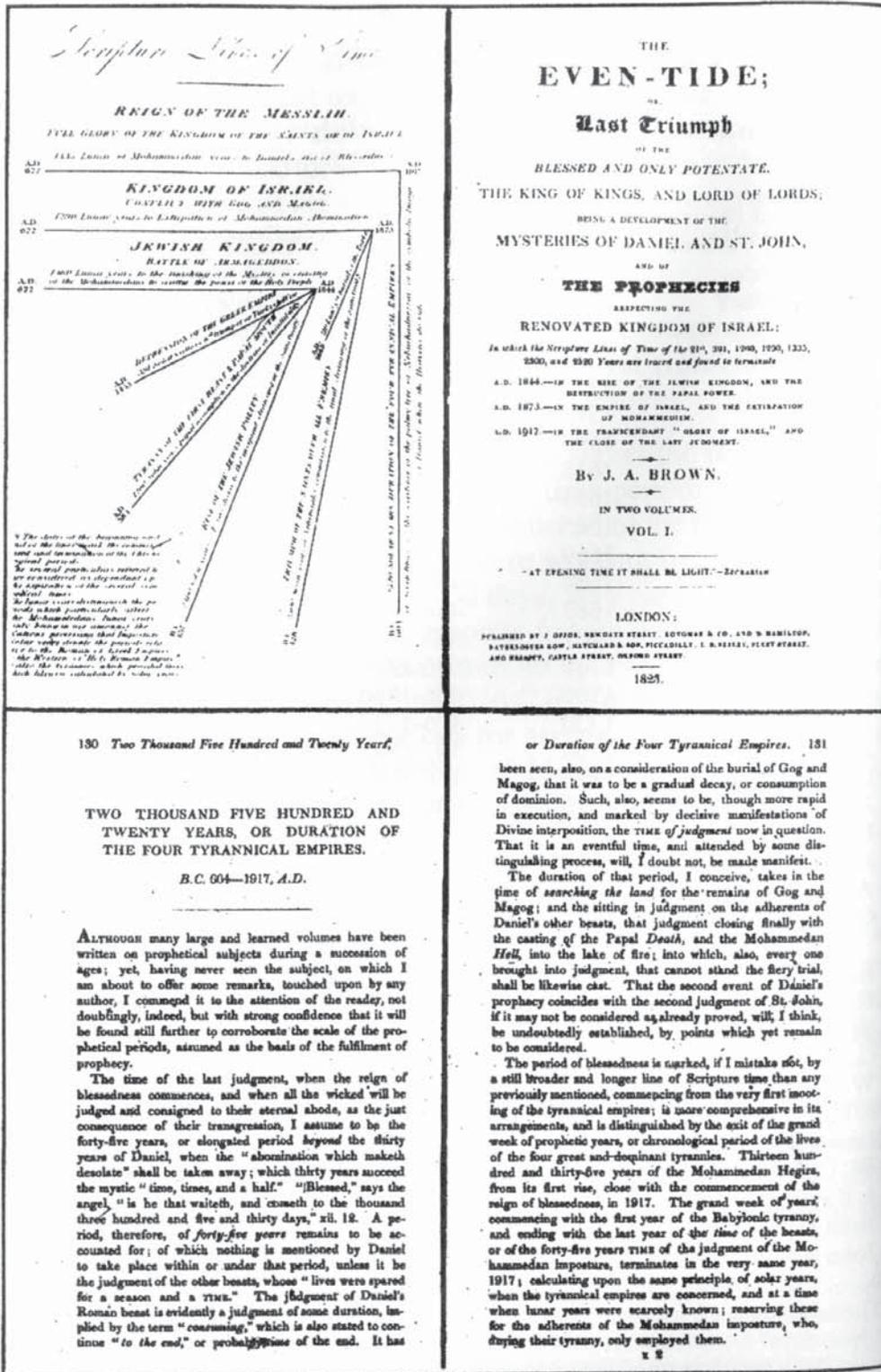
結論：ダニエル書の「七つの時」とルカ21章の「異邦人の時」を合体し「一日を一年」を預言の年代計算のための公式として使用して、回復の年代が幾多も算出されて来ましたが、そのどれも的外れでした。※4(巻末資料参照)

それらの失敗が物語っているのは、何の根拠もなく、それらの聖句を寄せ集めて、神以外誰も知り得ない、時を算出しようとするアイデアそのものが勘違いであり、非聖書的であることを証明しているということではないでしょうか。

聖書そのものが明確に示している「異邦人の時」の期間は、「野獣に聖徒が渡される」3年6ヶ月です。

※1 卷末資料

ジョン・アクィラ・ブラウンの著作
 ダニエル4章の「七つの時」は2520年を意味する事が示されています。



John Aquila Brown's book *The Even-Tide* (London, 1823), in which the "seven times" of Daniel 4 for the first time were explained to mean 2,520 years.

※3 卷末資料

N・H・バーバーによる「朝の先触れ」誌 1875年7月号
2520年の終わりが1914年であることを示した初版

48 THE GENTILE TIMES RECONSIDERED

Vol. 3. SEPTEMBER, 1875. No. 4.

HERALD OF THE MORNING.

52

to ans
I be
and th
God.
to be
adven
took u
has a
I be
the na
tho we
only n
to the
is, for
I be
foreve
tinnal
end of
ing of
of all
is call
it beg
in the
and n
this ti
tion of
ing of
transla
ing of
meet t

The seed of the woman shall
Come thou and all thy
Now the Lord had said to
thy country; into a land that
these shall all families of
And ye shall be unto Me

"Take off the diadem:
I will overturn, overturn
it shall be no
He come whose
and I will give

D. GOSWELL,
Danville, N. Y.,
Corresponding

bruise the serpent's head.
house, into the ark.
Abram, get thee out of
i will shew thee; and in
the earth be blessed.
a kingdom of priests.

remove the crown:
overturn it, and
more until
right it is:
it Him."

J. H. PATON
Almont, Mich.
Editors.

N. H. BARBOUR, Editor, ROCHESTER N. Y.

One Copy, per annum, 60 Cents; Four Copies, to one address, \$2.00.

I believe that though the gospel dispensation will end in 1878, the Jews will not be restored to Palestine, until 1881; and that the "times of the Gentiles," viz. their seven prophetic times, of 2520, or twice 1260 years, which began where God gave all, into the hands of Nebuchadnezzar, 606 B. C.; do not end until A. D. 1914; or 40 years from this.

Herald of the Morning of September 1875
in which N. H. Barbour first published the year 1914 as the end of the 2,520 years

※4 巻末資料

黙示録に示される「1260日」を「1日を1年」を適用して年代計算を提示したリストの一例

TABLE 1: THE MULTIPLE, SHIFTING APPLICATIONS OF THE 1,260 YEARS

Expositor	Publication date	Application (all dates C.E.)	Remarks
Joachim of Floris	1195	1-1260	
Arnold of Villanova	1300	c. 74-1364	Gentile Times=1290 years
Walter Brute	1393	134-1394	
Martin Luther	1530	38-1328	Gentile times =1290 years
A. Osiander	1545	412-1672	
J. Funck	1558	261-1521	
G. Nigrinus	1570	441-1701	
Aretius	1573	312-1572	
John Napier	1593	316-1576	
D. Pareus	1618	606-1866	
J. Tillinghast	1655	396-1656	
J. Artopaeus	1665	260-1520	
Cocceius	1669	292-1552	
T. Beverley	1684	437-1697	
P. Jurieu	1687	454-1714	
R. Fleming, Jr.	1701	552-1794	1260 years of 360 days
" "	1701	606-1848	= 1242 Julian years
William Whiston	1706	606-1866	
Daubuz	1720	476-1736	
J. Ph. Petri	1768	587-1847	
Lowman	1770	756-2016	
John Gill	1776	606-1866	
Hans Wood	1787	620-1880	
J. Bicheno	1793	593-1789	
A. Fraser	1795	756-1998	1242 Julian years
George Bell	1796	537-1797	
" "	1796	553-1813	
Edward King	1798	538-1798	
Galloway	1802	606-1849	1242 Julian years
W. Hales	1803	620-1880	
G. S. Faber	1806	606-1866	
W. Cuninghame	1813	533-1792	
J. H. Frere	1815	533-1792	
Lewis Way	1818	531-1791	
W. C. Davis	1818	588-1848	
J. Bayford	1820	529-1789	
John Fry	1822	537-1797	
John Aquila Brown	1823	622-1844	1260 lunar years

The table shows a sample of the many different applications of the 1,260 and 1,290 "year-days" from Joachim of Floris in 1195 to John Aquila Brown in 1823. It would have been easy to extend the table to include expositors after Brown. However, the table ends with him because at this time another interpretation of the Gentile times began to surface, in which the 1,260 years were doubled to 2,520 years.